

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.22 駅前ロータリー

かつてセメント彫刻が好んで設置された場所の一つとして、駅前ロータリーがあった。駅前ロータリーは駅の印象を左右する重要な場所だ。掲載した写真のセメント彫刻は、東武鉄道東上本線のときわ台駅（T J 06、東京都板橋区）の北側ロータリーに存在する（図1・図2）。

作品は白色セメントを用いた人物像である。人物はやや右足に体重をかけて足を広げ、右手は腰に当てている。目鼻口など顔貌が表現されていないため、無機質の人形のような印象を受ける。作品は水を湛えた噴水のなかにたち、色彩豊かな草花が作品を引き立てている。背中の一部に苔が生え、剥落や亀裂もあり、作品の状態は決してよくはない。設置は1959（昭和34）年、作品名は不詳だ。作者の志田達三は常盤台に在住した彫刻家で、小学校の図画教師の勤務経験もあり、セメントを原料に自作したプレイ・スカルプチャー（遊戯彫刻）を勤務先の小学校の校庭に設置するなど、美術教育の分野でも定評があった。プレイ・スカルプチャーは遊具の一種として公園に設置された。

作品の台座に備わる銘板は言う。「美しかった駅前広場も戦後は荒れはて美しさを失うばかりでなく社会教育の上からも常に寒心に堪えない処であった。丁度そのころ常盤台小学校児童の奉仕作業によって駅前の美化は着手され、やがて子供たちの努力は美しい花を開き、駅前の美化は着々と進められた。（中略）賛助くださった方々等の力が結集して再び近代的な美しさを誇る駅前広場として改装を見るにいたった。広場に咲いた花のように美しい人の心に感激と感謝のうちに完成されたものであるだけにそのよろこびは一そう深いものである。（後略）」この銘板の文章の作者は、常盤台小学校校長を務めた福田武次。この福田の文章は、戦後の日本で彫刻が公共空間に設置された経緯をよく示している。セメント彫刻の設置場所は社会や世相を映し出すのである。

戦後における野外彫刻展の開催や公共空間への彫刻の設置には理由があった。戦争で荒んだ人心を慰め、荒廃した都市を復興する目的で、全国規模で街頭美化や都市美を目指す都市景観施策への関心が高まり、その実現手段の一つとして公共空間への彫刻作品の設置が推進されたのである。駅前ロータリーはその格好の場所で、国鉄（当時）・私鉄・新幹線や地下鉄などの区別なく、駅前ロータリーに彫刻作品が置かれてきた。筆者が把握しているセメント彫刻の設置の事例だけでも、上野駅、浦和駅、小野田駅（当時）、岡山駅、別府駅、銚子駅、枕崎駅、富田駅、豊橋駅、盛駅などを列举できる。

しかし現在では状況は逆だ。駅前ロータリーからセメント彫刻が撤去されているのだ。前述の駅のうち現在もセメント彫刻が残るのは、小野田駅（現在では山陽小野田駅）と盛駅のみである。前述の駅の場合、ほとんどのセメント彫刻は撤去後に他の場所に移設されている

が、廃棄された事例もある。都市計画の変更、新線の敷設、道路拡張などの様々な理由でセメント彫刻は元の居場所からの移転を余儀なくされている。

青瓦と大谷石が特徴的なときわ台駅の外壁には、ギャラリースペース「武蔵常盤小径」が設置され、同駅の周囲の変遷が11面のパネルで展示されている。そしてロータリーには「エコポリス板橋」環境都市宣言を記した看板が設置され、「真に快適な環境を創造するために人と環境が共生する都市」の実現を目指すことを謳われている。1935（昭和10）年の武蔵常盤駅の設置は、常盤台住宅地の開発とともにあったが、1993（平成5）年のエコポリス板橋「環境都市宣言」、2007（平成19）年の「ときわ台景観ガイドライン」の制定など、開発と景観のバランスの維持に努力が払われている。目まぐるしい変化のなか、志田達三によるセメント彫刻は、今日もときわ台駅前ロータリーにある。



図1 ときわ台駅前



図2 志田達三の作品（正面）